

最近心理學の發達

深 田 武

最近に於ける心理學の發達を論ずる事は、實は、容易な事ではない。自分には未だ此の問題に對して充分な解答を與へ得る様な準備ができて居らぬが故に、暫く *Philosophical Review* XXVI (1917) に載せられたる Pillsbury, W. B. 氏の論文、*The new development in Psychology in Past quarter century* に依つて、其の概觀を窺つて見る事にした。右は同誌が創刊せられた一八九二年から一九一七年に至る二十五年間に於ける心理學の發達の有様を大略述べて居るのである。今二十五年前の心理學界の有様を回顧して見れば、其處に著しい進歩發達の行はれた事がわかるであらう。尤、斯學の輪廓は既に二十五年前に略ぼ整つて居たし、

研究方法、研究の態度も今日とさして變りは無かつた様であるが、近代に於て著しく發達した、そして凡ての議論が其れの土臺の上に築かれる様になつた實驗的の仕事は、未だ餘り多くは爲されて居なかつた。そして其の爲された實驗も、僅かに Ebbinghaus が記憶に就いて行つた外は、多くは感覺とか、ウェーベルの法則とか、空間知覺とか、反應時間とか言ふ様な方面に限られて居た。聯想とか其他、觀念的方面の實驗もあるにはあつたが、單に豫備的に行はれたに過ぎなかつたし、意識現象に伴ふ身體的變化についても極めて僅か許りの實驗が施され、而かも其の結果は後に至つて誤つて居る事が證明された様な有様であつた。

又、一體に、斯學の中心問題の研究が盛でなかつたと共に、其の應用方面の問題も等閑に附せられて居た。例へば教育上の問題でも單に憶測に依つて取扱ふと言ふ有様だつたし、精神病學の方面でも未だ狂人の精神状態を實驗的に研究するまでには至らなかつたし、更らに、動物心理學の方面を見ても、たゞ anecdote を集めて、偶然的な、實驗に基かない議論をなすと言ふ有様であつた。然らば如何様にして、是等の方面に心理學が交渉して往つたであらうか。

まづ心理學と教育との關係に就て見るのに、第一兒童研究の發達が、教育に著しい影響を與へたと云へる、兒童研究は Piaget の研究に始まつて數年間に目覺しい發達を遂げたのであるが、始めは其の研究法として探つた所謂「發問法」が未だ信頼するに足る程のもでなかつたためや、完全に研究された範圍の狭かつた事等のために、其の研

究の結果が教育に影響を及ぼす程度は餘り多くなかつたと言つてよい。勿論「發問法」は漸次改良されて、終には、Stanley Hall の名著 *Adolescence* を生むに至つたのであるが、兎に角、此の方法を採用するに至つたが爲めに、得た利益は、兒童の實驗的研究の大切な事を感じしめた同時に、一般に教育上の諸問題に就ての研究も甚だ主要な事を認識せしむる様になつたと言ふ點に在る。次に、Pearson 一派の統計法を採るに至つた事も教育の進歩を促した一因と見られる。即ち各個人の記録や、意見の中から夫等に共通した意見を見出すと言ふ方法や、知能相關々係の係數を應用する事等に依つて、心的特徴の遺傳を實驗的に研究する事が出來たり、或は、形式陶冶に關する論とか、生來有する又は生後獲得せる諸能力間の關係に關する議論等を吟味し得るに至つた。そして、是の方法の發達については、Cattell や Thorndike 一派の

人が與つて力ありて言はねばならぬ。教育の方面に影響を及ぼしたものは、以上特殊の方面の外に更らに、一般心理學の研究を數へ得る。即ち、知覺作用や動作の一般的法則を決定せんがために爲されたる読み方及び書き方の研究や、起憶、想像、思考、動物の學習、注意作用等の研究の結果から暗示を受けて、實際の教育も又其の理論も共に改良される點が多かつたのである。

次に、精神病理學に對しても、心理學は新しい方法を提供し、多くの問題に對する態度を變へしめた。從來、精神病理學に於ては、單なる觀察に基いて診斷を行ひ、其の説明も神經病理學上の言葉を以て爲すと言ふ有様であつた。換言すれば、精神上の異常をば腦髓の異常に歸するのが例であつた——、腦髓の缺陷異常を證明できない様な場合があるに拘らず——。而し心理學の發達と共に漸く心理的原因に注意が向けらるゝ様になり、心

理的に説明せらるゝ様になつて來た。かくて病院の中に、實驗場が設けられ、患者の精神状態を検査すると言ふ企てが、起つた事に依つて「精神検査」が診斷の方法として採用せらるゝに至つた。

一體、「精神検査」又は「知能検査」は、實驗的の仕事が始まつた際から多少試みられては居つたが、一般に用ゐらるゝ様になつたのは、一九〇五年 Binet 及び Simon に依つて始めて、一般的の標準が示されてから後の事に屬する。此の方法の特徴は、各年齢の兒童が「検査」に於て爲し得る事柄を決定し得ると言ふ事と、次に其の結果を病人に就て検査した場合の結果と比較し得ると言ふ點にあつた。是の「精神検査」の方法に依つて成功したのは先づ、精神上に缺陷のある學生を發見せんとする方面に於てであつた。即ち學校に於て、此の方法を應用した結果は、普通の仕事から利益を得る丈の充分な能力を備へない様な兒童を

發見し、其れに對して其れ相應の仕事と與へて漸次に其の能力を發揮せしめると言ふ様な事に成功した。更らに面白い事は、犯罪者や貧困者の多くが、精神的發達の不良に基く事を此の方法に依つて發見し得た事である。犯罪者に就て此の方法を試みた結果に依ると、感化院の厄介になる者の二〇%乃至五〇%は精神的に普通以下である事を示している。かくの如く、犯罪や貧困の根本的原因が精神薄弱に在る事の發見が社會上の問題を取扱ふ上に大いなる影響を與へるに至つたのは勿論である。兎も角、かくの如き「精神検査」が精神病理學の方面に應用せられて、それがために、種々の精神病の診斷が面目を一新して來たのは前述の通りである。是の精神病理學の範圍に於ては特に、Hysteriaの研究が心理學と密接なる交渉を有している。心理學がHysteriaの研究に貢獻した事よりも、Hysteriaに關する臨牀的研究が心理學に及

ぼした影響の方がむしろ多いと言ふべきであらうが、而かも Freud 一派の所謂「精神分析法」や、Jung の「聯想診斷法」は心理學の實驗的方法をそのまゝ應用するか、又は、その暗示によつて成立したものと云へる。

次に、動物心理學の發達はどうかと言ふに、Thorndike が始めて動物の行動に就いて實驗的研究を試みた一八九八年を起點として著しい進歩を遂げた。氏の實驗した結果に依ると、雞や犬や猫は、所謂「Trial and error」の仕方に依つて徐ろに學習する事、動物が、或る命ぜられた行動を正しく行ひ得るのは最初は「偶然」に依るのであるが、屢々反復する中に次第に習慣に變じ、遂には課せられた問題に對して即座に正しい行動を爲し得ると言ふ様な事が明かになつた。此の事實は其他の多くの動物についても認めらるゝ事が段々わかつて來たのであるが、かくの如く動物の學

習と言ふ問題が動物心理學の重なる位置を占めて居た中に最近には動物の感覺に就ての研究が大に發達する様になつた。例へば、光とか、化學的刺戟とか、音とか言ふ様なものに對する感受力の程度に關して、廣い範圍に渡つて實驗が施される様になつた。又一方に於て動物の諸本能の發達及び夫等と練習との關係等に就ての研究も注意深く爲される様になつた。かくて動物心理學に於ける最重要な且つ、一般的な問題、即ち、動物は思考作用を有するかどうか、もつと一般的に言へば如何なる範圍迄、人間の有する様な意識を動物にも許し得るかの問題に就ても盛な議論が起つて來た。此問題は勿論かなり古くから哲學者の頭に上つたものではあるが其れに關する議論の盛になつたのは實驗が始つてからの事である。生物學者の *Loew* は、下等なる有機體の營む動作は純物理的化學的の言葉で説明ができると言ふ事を證明して、

高等なる有機體と下等なる有機體との間に境界線を設けようとした。即ち、下等なる有機體は植物と同じく“*Tropism*”のみを有するに反し、高等なる有機體は人間に近く、聯想的記憶に依つて動作を爲すと説いた。Bethéは更らに進んで或る物理的化學的の作用例へば、*surface-tension* とか *Osmosis* とか或はもつと嚴密なる意味の化學的の反應丈で、動物の營む凡ての動作を説明し得ると説いた。Jennings は、Bethéの結論を是認しようとしたが却つて、物理化學的の作用のみで、充分に動物の動作を説明し得るとなす、Bethéの假説は、單細胞動物の場合すら正當に主張する事ができないと言ふ結論に達した。即ち此は、最下等動物の或るものが最簡單な仕方の學習をなすと觀得る場合のある事や、以前に爲した動作の結果として、動作の變更が行はれたと考へ得る場合のある事を發見した。同時に又夫等の動作に意識が伴

ふものであると假定する何等の理由の無い事を發見し、夫等の動作を表はすに "Behavior" と言ふ言葉を用ゆべき事を暗示した。夫れ以來此の言葉は、一般に採用せらるゝ様になり、遂には高等なる有機體の營む動作にも用ゐらるゝ様になつた。夫れは高等なる有機體の營む動作は外觀上下等なる有機體の營む動作に比して、たゞ其の複雑の度を増したものにすぎないと言ふ理由からである。兎も角、此の言葉は、有機的動作と無機的動作と別區する事に役立つし、又有機體全體としての動作と、其の有機體の動作を構成する各器官の動作とを區別する事にも役立つのであるが何れにしても、意識の有無には無關係であつて、動作は生理的化學的の言葉や他の意識過程などに依つて說かれるよりはむしろ「本能」とか「個人の過去に於ける經驗」と言ふ様な言葉で說かるべきであると云はれる。右の如く意識の問題に關してなされた

種々の觀察の結果から、夫々異なる結論がき出されたのであるが、大體に於て、多くの學者は、意識の存在を下等な有機體に認めないと言ふ事に一致して居る。而してたゞ Watson 一派は、動物心理學者にとつて意識の有無が無關係であるとなすにとゞまらないで、意識の存在を全く否定して居る。Watson は恐らく彼自身の内省により、又 *imageless thought* や *neo-realism* の影響を受けたのであらうが、意識の存在を人間にも動物にも否定し、凡ての動作（人間でも動物でも）は外部より説明されなければならぬと説くのである。此れに反して *holism* は人間の意識の存在を認むるは勿論、その他の高等動物に於ても其の動作の管理に、*Image* が携はつて居る事を許して居る。此れは、動物の營む動作が、刺戟の時間よりも延びる事があると言ふ事實や、多くの動物の動作が、意識に依つて伴はるゝ人間の動作によく類

似して居ると言ふ事實を觀察した事が、氏をして右の様な考を抱かしむるに至つたのであらう。併し何れも、其の前提の取り方、言はゞ出發點が異なるのみで共に夫々の前提から當然導かるべき結論に達して居ると言ふ事ができるのであつて、畢竟個人的趣味の差異に歸するであらう。

次に、心理學上の研究が實際的の方面に應用せられた有様はどうであつたらうか。先づ此の方面では、廣告の心理學が起つた事を挙げねばならぬ。即ち如何にせば顧客の注意を引き、深い印象を與へて結局、買ひ求めると言ふ反應を起さしむる事が可能であるかと言ふ問題は、普通の心理學に於ける研究の結果を整理應用する事に依つて解決がつくと氣づいた所に此の種の研究の發端を求める事が出来る。かくて、最近には實際の廣告材料を用ゐ、自然のの態狀の下に於て實驗を施すと言ふ域まで進み、従つて心理學の實驗場内で、廣

告に關する或る種の問題に解決が與へられる様になつた。而して其方面では *John A. Hirsch* の研究が直接間接に影響を及ぼしたと言ひ得る。かくの如く、心理學が實際的の方面に應用せられて先づ廣告の心理學が盛に研究せらるる様になつた一方に於て、前に述べた精神検査法が、從來専ら低度の知力検査にのみ適用せられて來た状態から進んで、更らにもつと高尚な精神能力の検査と言ふ方面が開かれる様になつて來て、此れがやがて、或る職業に對して人を選択する場合に用ゐらるゝ方法として應用される様になつた始まりを作つた。例へば、電話交換手とか、書記とか速記者であるとか、乃至は行商人の選擇に至るまで心理學的の検査法を土臺として行はれる様になつた如きである。勿論、此の種の検査法は今日の所未だ完全なりとは言ひ得ないのであるが、心理學者は之れが益發達して、終には、凡ての個人に就て誤なく其

能力を検査し、夫々適當なる職業を與へ、かくして各個人が遺憾なく其の能力を發揮し得るに至る様な時代の來る事を夢みてるのである。

以上述べて來た事は、言はゞ、心理學の *outsight* に於て行はれた變化に就てゝあつた。而し是等の變化の多くは、もつと中心的な問題に關して行はれた變化と關聯して居つて、兩者は互に影響を及ぼし合つて來たと言へる。而し、心理現象の説明に關する一般的理論は、此の二十五年間に比較的變化が無かつた様である。換言すれば以前に對立して居た若干の理論は今日でも尙、明かに對立を續けて居つて、其の間に共通した見地を建てると言ふ迄には至らなかつた様である。然らば、其の、心理現象の説明に關する一般的理論の種類は、如何と言ふに、大別して二種となす事ができる。即ち其の一は、*animistic explanation* で其の二は、*Causal explanation* である。前者は、精神現象に關

する最後の説明を一つの *force*——それは屢、*anthropo morphic form* に於て與へらるゝが——に求め、後者は精神現象の各の要素が、夫等より更によく知られてる他の要素に還元せらるゝ、事に満足して居るものである。此の二種の説明が對立して居つて各時代に夫々の消長はあつたが、追々として、*animistic explanation* の方が勢を占めて來る傾向を示してゐる。前に述べた、*Freud* の説即ち、意識に決定的の力を與へるものは、意識の下に存在して居て、夫れが常に意識の範圍に押し入らうと企てゝ居る。換言すれば *total self* とは全く獨立した要素の存在を假定して、夫れが意識に影響を及ぼすと觀る事は、とりもなほさず *animistic* な説明であると言へよう。そして、是れは恰、自然現象を、目に見えぬ *god* や、*ghost* で以て神秘的に説明しようとするのに似て居る。

最後に普通の心理學の範圍に於ては、近時盛に

論ぜられた所謂“*imageless thought*”に關して、不思議な程異なる見解が提供された。今、夫等を分けて見れば、大略二つになる。一は全く、*animistic*の立場をとつて居ると見らるゝもので、それに依れば、思考作用は吾々の觀察し得る意識以上の場所で行はれるものである。又 *Frend*の説に在つては意識に決定的の力を與へるものは *Sub-Conscious* の作用であつたが。それと同じ様に、思考作用は、*Super-conscious* の營む作用である。少くとも、吾人に知られる様な法則に従ふものではない。吾々の普通の意識よりも更らに高 *Authority* を持つて居るものであると言ふ事になる。他の見解はそれと全然反對に、意識を全く否定し、所謂精神作用の説明は、物理的若しくは、生理的に爲され得るとする。既に、思考作用の如き、高等なる精神作用に意識を要しないとすれば、日常生活に於ける簡單な動作には勿論意識を

必要としない譯である。かくの如く、右の二つの見解は全然相反するものであるが、此の兩様の説明の中間に更らにもう一つの説明が考へ得るであらう、其れは、即ち、意識状態を他の意識状態で説明すると言ふ事であつて、今も尙、多くの心理學者によつて認められて居る。即ち、ある精神作用の先行者であり、又、原因であると考へらるゝものが物理的のものでなくて、精神的のものであるとなす點に於て、此説明は、*animistic explanation* とも異なり、又、行動主義とも一致しない。

之れを要するに、二十五年前を回顧して、當時の心理學界と現今の心理學界と比較して見るならば、其發達の著しかつた事は、否定出來ぬとしても、それは、ある一つの體系を作るとか、一般に認めらるゝ共通の見地を發展せしむると言ふ方面に於てはなかつた事に氣がつくであらう。即ち發達したのは、むしろ、研究の範圍が廣まり、觀

察された事實が増加し、個々の問題に關する部分的の説明が爲されたと言ふ點に在るのである。一般的に言へば、精神状態の叙述、分類と言ふ方面に重きを置くよりは、精神活動や動作の因果的力學的説明により多く、力を入れる様になつて來たと言へるであらう。而して大體に於て、變化は徐々として起り、革命的發見は無かつた。

附記。同じ雜誌に載せられて居る Washburn 氏の

論文、'The last quartercentury in Psychology'、此の方面について更に詳しく研究を爲さんとするものにとつて Discussion を與へる事と思ふ。

彙報

哲學倫理學會

二月十八日午後六時より學生集會所に於て例會を開き、左の講演あり。

○實踐的感情移入説に就て 文學士 尾生光三郎君

桑報

心理學讀書會

二月二十日午後三時より實驗室にて開催。

○青年の宗教心に關する研究 文學士 藤澤 乙 夫君

B. Erdmann; Hypothesen über Leib und Seele

文學士 須藤 新 吉君

藤澤君は先づ、現代青年の宗教的教養の極めて乏しい所以を説き、かくの如き青年に向つて所謂「發問法」を適用しても、その得たる結果は、價値少しとなし、神や佛と云ふ様な言葉を用ゐず、に他の方法に依つて、何等かの形に於て彼等が有すべき宗教心を發見する道は無いかを考へた結果、六種の問題(一、最、恐ろしいものは何ですか、二、最、心配なのは何ですか、三、最、苦ししいものは何ですか、四、最、欲しいものは何ですか、五、最、大切なものは何ですか、六、どんな人になりたいですか)を案出し、男、八十七名、女百二十四名、に就て其の答案を求めた。と述べ、其の結果を整理して表示し、夫等の中に著しく表はれてゐる點を指摘し、以て彼等青年の有する宗教心が如何なるものであるかを簡単に説明された。

次に須藤君は頭書の書物の大要を簡明に紹介せられた。

教育學會

二月十八日午後六時より學生集會所に於て例會を開き、左の講演あり。

秀才教育に就て 京都府立師範學校附屬主事

松田精四郎君

一一九